ふるさと農村活性化フォーラム要旨

１開会挨拶　実行院長　友利隆雄

　皆さんこんにちは、お忙しく、天気もよくない中お集まりくださいましてありがとうございます。大先生方からいろんな意見を聞くことによって、地域の活性化に向けてがんばりましょう。

２ふるさと農村活性化基金　事例報告

（１）　友利なりやまあやぐ祭り実行員会副会長　奥濱健

友利学区は人口は約５３０名。
なりやまあやぐは今は宮古を代表する民謡。
昔から友利で謡い継がれてきた。
平成１７年に歌碑を建立したことをきっかけにこのまつりを始めた。
今年で９回目を数える。
先人が残したなりやまあやぐをこれからも歌い続けていく。

平成２４年度「沖縄、ふるさと百選」交流部門認定団体。

（２）　上区獅子舞保存会会長　喜屋武会長

上区は宮古の真ん中に位置する。
下北部落各地域の部落の財産を守る、部落の数名で部落の用地を
旧暦の十五夜にはウタキ（拝所）に拝んでから、獅子舞を奉納する。
砂川中学校の運動会では、中学生に獅子舞指導している。
いろんな催し物にひっぱりだこである。
ふるさと百選にも認定されて、ぷからっさ（嬉しい）。
これからも 36 名のメンバーで頑張っていきます。

司会補足：
宮古に獅子舞を持っている地域はいくつかあって、青年会の役割としているところもあれば、自治会役員が神事の時のみ獅子舞を舞うこともある。
上区でも、最初は行事の時のみ獅子舞を踊っていたが、残していくためには組織を作らなければいけないとのことで、上区獅子舞を作った。

砂川中では、運動会の時に獅子舞を踊り、指導している。後継者育成に力を入れている。これらの取組を評価し平成２４年度「沖縄、ふるさと百選」集落部門に認定された。

（３）　平久保サガリバナ保存会事務局長　平良八重子

八重山は西表島の出身。現在、平久保サガリバナ保存会の事務局長
サガリバナは夏の風物詩でもあると雑誌「やいま」に掲載された。
9月２０日に腰痛の手術―宮古に行く気持ちでリハビリも頑張った。
皆様方の前に立たせて頂いたことが光栄です。色々とアドバイスをお願いします。

「平久保サガリバナ活動報告」
石垣市観光交流記念の植樹祭など、行政とタイアップしている。
環境省が国立公園化を計画している。
最初は夫婦で管理していたサガリバナ群落。今は仲間も増えた。
夜に花が開き朝の日差しを受けてぽつりぽつりと短い命を終える。
約１００ｍ程の遊歩道、花が最も付く時期には足下にライトアップする。
交通事故にあい１０年間車いす生活の方も感激した。３００本あまりのサガリバナが見られる。
保存会は９名で立ち上げ、農道の草刈り、第二回、清掃、看板の作成、環境性等のボランティア活動が認められ、ふるさと百選に選ばれた。これからもがんばります。

（４）　狩俣自治会会長　久貝　正吉

狩俣地域の地域活性化について。
狩俣は超少子高齢化です。
昔から干ばつがくると作物がやられたが、土地改良で土地の有効利用されている。
追い込み漁は友利さんが始めてから５０年。とてもさかんである。
さとうきび、マンゴー、タバコ等、若い人ががんばっている。
集落には昔からの資源がたくさんある。
今年度から歴史文化村の組織を作り案内人の育成や特産品の開発の活動を始めた。
ふるさと農村活性化基金事業で、ピンフ岳ファームポンドの受益８集落でファームポンド祭りを３年間行った。その精神を受け継ぎ、毎年８月３日を畑水（ぱりみず）の日として、土地改良施設の清掃を行っている。
今年６月から歴史文化村づくりに取り組む。ウォークマップの作成や案内人の育成、特産品の開発を行う。

平成２５年度ふるさと百選に認定された。ふるさと百選の祝いをしたとき子供達から質問があった。ふるさとの事を学べる良い機会だった。
いろんな施策を活用して笑顔いっぱいの狩俣を作っていきます。

４基調講演「宮古・友利の歴史と文化」　宮古郷土史研究会会長　下地　和宏

友利には長い間お世話になっている、なりやまあやぐの関連行事である、子供達のための歴史学習会「元島学習会」は９回を迎えた。受けた子供達は大人になっている。

なりやまあやぐまつりの時期には多く台風が来襲する。友利地域は台風とは切っても切れない縁があるが、大きな祭りを毎年開催し、これからも地域活性化のために頑張っていくだろうと思う、周りの皆様も支援していただけると思っている。

地域活性化の為に歴史的背景がどれだけ役立つかは分からない、自分は畑も持ってないが、先人達から培ってきた歴史をひもときたい。

今日のお話は大きく分けて①土に埋もれた友利について。先人が培ってきたものが土壌の中に埋まっている。

沖縄の歴史と日本の歴史は時代区分が違う。インギャーはもともと海浜で、たいへんなもの（遺跡）が見つかった。昔は、浜で石を焼いて焼き石で料理していた。貝斧や、埋葬された人が３体でてきた。ところが、この人たちが友利の人たちと繋がっているかはわからない。十三世紀以降の集落であり、十一世紀との間に空白がある。空白が埋まれば友利の人は十一世紀からいることになる。

十四世紀の話、統治していたのは金志川豊見親。友利、当時は城辺と書いてぐすくなぎといった。琉球が直接宮古を統治していた。宮古の頭、平良、下地、砂川の頭、これを管理する人が琉球から派遣されてくる。今で言う検察庁的な立ち位置だ。
当時は明和の大津波だが、明和は日本の年号、当時、明和は使ってなかった。中国の暦だった→乾隆３６年。

かつてのぶんみゃあ（役人詰め所）跡に集落センターが作られている。そこに道路開墾記念碑がある。今は塀で全体が見えないが、大正時代に整備された。当時は砂川までしかなかった道を友利の人たちが道を開拓し、延長した。

最後になりますが、なりやまあやぐ、くいちゃー、獅子舞等、宮古には伝統文化があっ

てこれを大事にしていく必要がある。友利の人は、担い手が不在にも関わらず、祭祀行事は代理人を立てて延々とやっている。先人が伝えてきた行事をしなきゃならないという思い、それが祭祀文化の基礎になっている。

５パネルディスカッション「地域のつながりづくりと活性化について」

和崎先生＆小島さんの会話からスタート。

お祭りは地域の大事な資源。　房総半島の先である祭りがあるが、若者も祭りの為に帰ってくる。祭りは、歴史や文化をふまえて地域をつなぐ行事。

灘のけんか祭り（兵庫県姫路市）の写真。人が集まって地域が一つになっていく。
お祭りが衰退していくと、屋台も無くなっていく時期があった。

明治から第二次世界大戦にかけて人のつながりが衰退していった。人のつながりが衰退すると災害時に危険である。

九十九里浜に津波が来たとき、地元の消防団がどこに誰が住んでいるか知っており、消防団のつながりのおかげでほとんど人的被害はなかった。淡路島に関してもしかり、地域のつながりで、被害はほとんど出なかった。

地域ＳＮＳについて。パソコン上で高齢者の情報交換を行う。みんなのサロンになっている。山武では、パソコンの使い方が分からないかたに教えることから始まった。今は毎週２０名ほど集まる様になった。最近では若者も集まるようになってきた。→世代間の交流大切なのはキーパーソンが繋がっていくこと。

日頃手に入らない遠方の良品を共同購入する取組も行った。地域ＳＮＳでそういうちいきとつながり、購入希望者をあつめてまとめて購入するシステム。

地域メディアにもなっている。地域の方々がビデオカメラを持ち、動画を地域で発信する。

島根県海士町について。坪田さんより。船で三時間かかる離島が現在日本中から注目されている。十年前、財政が破綻しそうになったところ、みんながこの町で仕事をして欲しいという思いから皆が給料を返還し、冷凍工場を作成、。教育長は寄宿舎を作り、留学感覚で人を呼ぶ。塾を作り、有名大学に進学。村の活性化が起きている。島根県の人口が増え

てきている。宮古島は人、コンテンツ、歴史が魅力的である。ぜひ、活性化に取組んでもらいたい。

なかばりますますぷからす振興協議会　上里会長にバトンタッチ。

小さい自治会で、５年後、１０年後どうなっているか危機感を覚えて会を立ち上げた。空缶拾いで資金造りをしたり、新聞作り、特産品開発、絵本作成等の取組をこつこつと続けている。宮古の各地域のめざましい取り組みがあるが、それらをどうつなげていくかを考えていくことも必要。離島でも目を向けて貰う努力が必要。

６質疑応答・全体討論

八重山農林水産振興センター西銘：

人材作りのつながり、新しい方向として地域ＳＮＳだと思う。災害時にＳＮＳの効果を発揮すると思うが、ＳＮＳを広げていく上で、情報の信頼性は大丈夫でしょうか。

和崎：

信頼性が必要、信頼はソースから、ソースは顔が見える相手であることで信頼性が上がる。怪しい情報はあるが、実名の空間と匿名の空間では全然違う。地域ＳＮＳは実名であることから、怪しい情報であっても、察知した人が訂正確認を伝えることも出来る。また、地域ＳＮＳは完全招待制であり、知らない人は居ない。ＳＮＳは反応が早く、疲れて離れる場合があるが、その時実際に呼び戻しが出来ると考えている。

下里（友利集落）：

下地先生に質問。昔の人頭税は１５歳からだったが、友利は１３歳からと言われているのですが。家を番する代理者という名目で課税されていたらしい。

下地：

納税の年齢は地域の長に任せられていたところもある。なので、１５歳に満たなくても納税させられたという記述も残っている。

コーディネーター：

今日のパネルディスカッションのテーマは「地域のつながり作りと活性化」。離島、過疎地域は人口減少の傾向にある。宮古島の人口減少の対策と活性化のアドバイスを頂きたい。

下地：

まず、宮古らしさが無くなるようなことはだめ。宮古にあるものをどう生かすか。宮古を愛する人が増える事が重要。ないものを考えるのでは無く、今あるものをどう生かすか。若者を呼ぶには仕事を作る。若い人が定住定着できる環境をつくる。県内の４名の発表者の事例を聞き、その地域らしいことでがんばっているのだと感心した。

天野：

宮古島の文化と歴史を残しつつ新しい事を学ぶ。この規模では大学ができるのではないか。

平良：

話がとても良く感動したサガリバナで地域活性化をするのには、今の子供達が地元に戻ったときのために、今あるものを大事にしたいという気持ちをさらに新たにした。

７謝辞・交流会案内等

８閉会